

一番の教材

第9期 秋山 賢輔

だらけきった日吉での生活を克服すべく、おそろおそろ小野ゼミの門を叩いたときのことを今でも覚えている。大学4年間、いや、人生を通してこの2年間はとても内容の濃いものだった。とまあ、本来ならば小野ゼミでの思い出をつらつらと書きたいところだが、それはHPを見るといつでも思い返せるので省略しよう。ここで僕が書きたいことは、小野ゼミで何を学ぶことができたかだ。

小野ゼミで学んだものはたくさんある。マーケティングに関する知識、ワードやパワーポイントを用いた資料作成能力、そして、上手く相手に伝えるためのプレゼンテーション能力。これらは、小野ゼミでのレポート課題やケース発表などの活動を通じて修得することができた。しかし、これらは小野ゼミに限ったことではなく、他のゼミでも、あるいはゼミに入っていないくとも、目的を持っていればすぐに身につけられるものだろう（小野ゼミの先輩方が築きあげてきた環境があってこそだ、とは思うが）。僕がこれから大切にしたいと思ったことは、小野ゼミの活動から学んだことではなく、小野ゼミの同期から学んだことだ。それは、「自己犠牲から成る成長」、「無知なりの探究心」、そして「楽しさの追求」である。

上に立つものとして、仲間たちに指示を出すだけでなく、仲間たちを支えることにも力を発揮しなければならぬ。組織の代表として活動する彼はいつでも仲間思いだった。そんな彼から良く聞いた言葉は、「何回も教えたから余裕!」。自分だってやることあるのに、仲間のために時間を割く。しかし、それが結果として自らの力となる。それゆえ、彼からは「自己犠牲から成る成長」を学んだ。

自分の能力の限界を常に認識し、誰に対しても低姿勢で教えるを請う。「分かんない」というその言葉が彼女の口癖だった。変なところでプライドの高い僕は、その一言がなかなか言えず、分からないまま物事が進んでしまうことがよくあった。それはプライドなんてものじゃなく、周りに迷惑をかけるだけでなく、自分の成長も止めてしまうことに気付かされた。それゆえ、彼女からは「無知なりの探究心」を学んだ。

就活に差し掛かった彼は悩んでいた。「このままなんとなく就職してなんとなく仕事してなんとなく生きて、ホントに俺は幸せになれるのか?」彼は何度も自分に問いただしたという。自分が楽しめることじゃないと意味が無い。そんな彼は悩みぬいた末に、周りに反対されようとも自分が本当に楽しめることをやろうと決意した。そんな彼を間近で見て、自分も彼のように人生を送りたいと思った。それゆえ、彼からは「楽しさの追求」を学んだ。

他にも、同期から学んだことはたくさんある。最後ではあるが、僕の人生に素晴らしい影響を与えてくれた仲間たち、そして、その仲間たちに出会うきっかけを作っていただいた小野晃典先生に、心より御礼申し上げて、卒業の言葉としたい。